ー青春小説ー

★　自らを越えて（六）　★

多谷　昇太

我が高校は鉄筋４階建ての校舎が２棟並行して建っていて、その間にコンクリートで舗装された中庭がある。ダンスはそこで行われたのだが意味するところは校舎内で授業中だった全校生徒らの目に俺たちが晒されたということで（少なくも窓側の生徒らには）そしてその六分の一は３年生の男子生徒だったろうから、彼らの目にはあまり有難くない眺めだったのではないか。とにかく以下その折りを記す。

朝礼台に立った体育の先生がなぜこうなったか（つまり３年女子と俺達１年男子の組み合わせになったか）を説明し出したが、それを中庭に先に出て整列して聞いていた俺達に合流すべく、校舎から３年生女子らが奇声を発しながら出て来た。「きゃあ、可愛い！（むろん俺達１年坊が）」とか「なぬ？１年坊…？！」「いやだ、モラル違反！」、あるいは「あ、あれ！あれがいい！」とか指差したりして、いろいろ云いながら。俺達の中でも云い返す奴もいたが俺はと云えばどうでもいいやという表情でただ閉口するばかり。こういったことには最も無縁な奴なもんでなどとムスッとしていたのだった…が…、その３年女子生徒らの間に大伴さんの姿を発見した途端に穏やかでいられなくなった。ま、まさか、大友さんと…などといっぺんでボルテージがあがる。一クラスと一クラスで四十数名づつ、果して大伴さんとカップルになれるだろうかと計算までしてしまう。朝礼台の男性教師が具体的に指示を始めた。俺達１年坊を内側に輪になって並ばせ、３年女子らを外側に並ばせる。二重の輪だ。そのあと朝礼台から降りて来て一名の女子生徒を相手に実際の動きを演じてみせる。しばらく演じたあとで男女それぞれを対面させ「ではやってみろ」とばかり暫時カップルを換えずに練習をさせた。このダンスはまず男女が対面して一礼をし、そのあと組み合ってステップを揃えながら暫し舞い、今度は男女がそれぞれ横に移動してパートナーを変えるのだった。肝心の大伴さんは輪の半分先よりややこちら側にいる。この一時間内ではたして俺の対面まで廻って来るものかどうか、定かではない…。やがて軽快なフォークダンス曲が中庭に響き渡って最初はぎこちなかったが不倫ダンスが、い、いや、三年女子と一年男子の踊りが始まった。

で、というか…ところで、実は先に記した通りこういうダンスなどという代物には俺は至って門外漢なもので、本当はその時のダンスが何だったのかよく覚えていないのだ。こうして往時をふり返って記すとなると、その時のダンスがどういうものだったのかを思い出し、且つそれを調べる必要がある。と云うのも実は先にオクラホマミキサーと記したのだが、そしてそれはそれに違いないのだが、どうもダンスは2種目だったらしく、始めはコロブチカという踊りだったらしいことがあとでダンスの解説書を調べるうちにわかって来た。コロブチカというのは始め男女が対面して手を取り合いながらステップを左右前後に踏み、そのあと離れて両手を横に広げて回転をし拍手を一つ打つ…というもので、この一連の動作が大伴さんにあっては実にセンスがよく、華麗で、目に焼き付いていたので思い出したことだったのだ。しかしながら、さらに俺の脳裡に焼き付いて離れないのは、俺が彼女を脇に抱えるようにして踊ったということで、そしてそれならばこれはコロブチカではあり得ない。従って云えるのは途中で曲がオクラホマミキサーに変わったということなのだが…。うーん…それで当時をよくよく思い出してみると…。うーん…。そうだ！そうだ、そうだ、確かにそうだ。思い出した。確かに曲がコロブチカからオクラホマミキサーに変わったのだった。それも絶妙のタイミングで。なぜそうなったのかその経緯を記すと…などと説明するよりは、思い出した以上、往時を実況中継風に記す方がよかろう。では往時にもどる…。

　そのコロブチカを華麗に舞う大伴さんがパートナーを換えながらどんどんこちらへと、すなわち俺のもとへと近づいて来る。あと幾許もなく彼女と対面して手を取り合うことが出来る思うと、いま対面している相手の女子生徒など目に入らない。ついにすぐ右隣まで来、手を取り合っていた（俺以外の）いまいましい奴と手を離し、離れて柏手を一つ鳴らして、やっと俺の前に来たところでしかし朝礼台から「待て」がかかった。曲が止んでしまった。

「はーい、こちら注目！」と号令をかける体育教師が鬼に見える。もう一時限が過ぎたのか？そんな…早過ぎる！これでは浮かばれない、無念に堪えないなどと憤懣やるかたないが、しかしもとよりそんな表情を億尾にも出す俺ではない。マドンナと手を取り合える、奇跡の現出とも云うべき、千載一遇のチャンスだったのに…などと、無念の研（こだま）が何度でも、心中で響きわたりはしたのだが…。

せっかく目の前に来た大伴さんに背を向けて致し方なく朝礼台をふり返る。俺には珍しく反骨心を込めた三角眼で体育の先生を睨みつける。大伴さんにはその顔を見られないし朝礼台の先生からも離れているから気づかれないだろう。『なぜ選りによってここで、大伴さんが俺の前まで来ていながら、曲を止めるんだ?!』などと未練がましく先生を心中で責め続けた…のだが、しかしそれはいかにも拙速に過ぎたようだ。先生はここから曲目（と当然ダンスも）を変える旨を云い、先程同様に朝礼台から降りて来ては一名の女子生徒をつかまえて模範のダンスを披露した。それがオクラホマミキサーだったのであり、この踊りは肩越しに相手の右手を取り、手前で左手を取ってはそのまま並んでステップを踏み、次に片手だけは繋いだままで女性が離れながら一回転し、今度は向き合ってステップを踏んだあと手を離し、次のパートナーへ移って行くというものだった。何回か踊って見せたあと「では（当然今の）パートナーと向き合って暫時練習せよ」と宣わってくれた。こうなると今度は同じその先生が、神様か何かに見える。嬉しさと期待に充ちた心を顔に出さないように、必死に制御しながら、俺はやおら大伴さんに向き直った。そしてその大伴さんはと云うと、俺に微笑みながらひとつ頷いてみせてくれて、ではどうぞとばかり横向きになって右手を肩の高さに上げ、左手をウエストの位置に保っては俺を誘う。生唾をひとつゴクンと飲み込んだ後で俺は夢遊病者のように大伴さんに近づき、その手を…と、取った。触れた、握った…。マシュマロのように柔らかいその手の感触と、肩越しに抱くようにした彼女のその身体が、そのオーラが、俺を有頂天にさせ夢見心地にさせる。そのまま実感覚が失せたようにステップを踏み出した俺の耳元にしかし「手を離して」の一声が。右手を離すべきところでそのまま握り続けていたからだ。あわてて手を離し「すいません」と上ずった声であやまる俺の廻りを一回転したあとで、未だ左手だけは繋いだまま、今度は俺の真向かいに対面した大伴さんが「はい、こうして足を交互に出して、首を左右に傾げて」と、その動作をして見せる。その姿はまさに優雅そのものだが対する俺はまるでうつけだ。まるっきりぎこちない。現実感が失せ続けている感じでしかなかった。しかしだからと云って「じゃ、もう一度」とばかり最初のポーズに戻って誘う大伴さんの右手を取らずに、その右腰に手を置いて、些かでも引き寄せてしまったのは痛恨の至りだった。「手よ、手。腰じゃなくって」と注意す

る大友さんの声にハッと我に返り、赤面羞髪天を突くありさまとなったのだったが、はたしていったい〝何が〟、俺をしてそんな破廉恥行為を為さしめたのか…まったく定かではない。魔が差したとしか云いようがないのだが、しかしその当の大伴さん自身は至って無頓着なままで平然としている。何ひとつ咎めるのでもない。そうこうする内に曲が鳴り始め、パートナーを換えながら踊る全体練習へと移って行った。もうこれで最後かと思うと今しがたの恥ずかしさはどこへやら、いま現実に、こうして、大伴さんの手を握っては、抱きかかえるように密着しているおのれの至福さを思うばかりである。このまま時が止まってくれればいいとさえ思う。その俺の強烈な念が伝わったものか２つの校舎を繋ぐ４階の渡り廊下辺りから３年男子の嫉妬の声が飛んで来た。「おーい、１年坊！俺たちの女に手を出すなーっ！」と。未だ授業中の時間の筈なのに２人の三年男子生徒が教室から出て来て、こちらを（間違いなく、俺と大伴さんを）見下ろしながら怒鳴っていたのだ。しかし、知るものか！である。超根暗でまったく覇気の無い俺のどこにそんな図太さが残っていたものか、俺は２人をまったく無視して大伴さんの手を握る右手に力を入れ、さきほど同様に彼女を我が身に引き寄せていたのだった。剰え、今度は最後に繋いだ手を離して隣のパートナーに譲る局面では一瞬でもその手を話さず、彼女にたたらを踏ませてしまった。わずかにズッコケた風を装いながら、また失笑しながら離れ際に大伴さんが俺の顔を見た。その目は俺にはどこかとても印象的で、何と云うべきか、恰も『君をインプットしたぞ。心に止め置いたぞ』とでも云いた気な視線だったのだ。それが良い印象でのそれなのかそれとも真逆なのか何なのか、いかにも捉えどころのないものだったのだが…。

　さてここら辺りで往時から今にバック・トウ・ザ・カレントしよう。ここはバス停で、いきなり俺の名を口にした大伴さんが目の前にいる。ちょうどあの時と同じ、不思議な眼差しを目に宿しながら（?と俺には思えたのだが）。「あのう、村田君…じゃありません?」なる問いかけに「あ、はい…そ、そうです。村田です」とだけ答えて、あとは真ん丸に見開いた目と緊張した全身でもって『な、なぜ、俺の名前を知っているんです?!』という驚きと疑問を露（あらわ）にするばかりである。その大仰に驚いた様子を大伴さんの連れの２人が面白がって吹き出したがそれを尻目に「ああ、やっぱり、村田君だった。お久しぶりでした。私が誰

だか…判りますかね？」と生真面目に聞いてくださる。判るも何も始めの一瞥でマドンナ大伴さんを色別出来ないやつは我が高校の男子生徒にはいないだろうし、ここいら近所の現役の男性諸氏に於ても同様だったろう。『はい、はい、はい、もう…もちろんです！』とでも云ってその御名を口にすべきところをしかしそれがた易く出来ない。なぜならば本人を前にしてその御名を口にすることはこれが始めてだったからだし、なお且つ彼女が俺の名を知っていたという感激に未だ浸っていたからだ。本来俺にどもり癖はないのだがこの場は猛烈にどもって返事をする。「は、は、はい。わ、わ、わか、わかります。お、お、おお、大友さん…で、です」連れの２人の女の子がついに声を立てて笑い出した。

（ー続く）

【時よ、止まれ。このまま永遠に大伴さんと…】